日本的美意識のアジア的基層

－芸術の京都、芸術のアジア－

神林 恒道（先端総合学術研究科教授）

研究計画

本研究は京都の伝統芸術に象徴される日本の美意識を、さらにアジア的な美意識の基層性において捉えてみようというプロジェクトである。その目指すところは、従来の西洋の人文学の翻訳学に留まらない、これと拮抗する「東洋の美学」、あるいは「アジアの美学」の確立である。誤解をおそれずにいえば、この研究は近代日本の最初の美学者岡倉天心の『東洋の理想』において掲げられた「アジアは一つである」という理念を歴史的に検証するとともに、西欧的モダニズムを超克する視点から、この理念の再構築、あるいはその可能性を探ろうというものである。

天心が「アジアは一つである」と確信するに至った芸術のジャンルとは「美術」である。この「美術」という語は、西欧の「アート」の翻訳語であり、東アジアではもともと「書画」と称されていたジャンルである。この「書画」を「美術」に翻訳する、いわば「東洋的」美意識を普遍化する機関と見なされてきたのが、明治期に招来された西欧の人文学の一つである「美学aesthetica」である。

研究代表者である神林は、一昨年『美学事始―芸術学の日本近代―』を上梓したが、その中で単なる西欧の人文学の翻訳に留まらない「世界の中の日本美学」を確立するためには、まず歴史的な反省に基づき、近代日本の芸術思潮を『日本の「美学」Aesthetics in Japan』と『「日本」の美学Aesthetics of Japan』の両極から再検討することの必要性を説いた。今回の研究はこの視点をさらに広げて、「アジアの美学」あるいは「アジアの芸術学」の可能性を問おうとするものである。

そこで見過ごされてはならないのは、西欧の翻訳学として始まった『日本の「美学」』の存在である。美学に限らず、東アジア、とくに漢字文化圏での人文学に関わる学術用語のほとんどが、明治期に工夫された翻訳語がもととなっている。にもかかわらず、第二次大戦後、アジア諸国での人文学研究は、意図的にかつての日本からの思想的影響を極力否定しようとする傾向があった。ところが、昨年、韓国ソウル大学図書館から、韓国美学会会長である金文燠教授によって、かつての京城帝国大学の上野直昭教授の講義ノートとその美学研究に関わる文献資料が発見され、同教授から共同研究の申し出を受けた。これはまさに日韓の美学の相互交流のミッシング・リンクの発見である。これに加えて、台湾美学芸術学学会からも、旧台北帝国大学所蔵による美学芸術学関連図書の資料提供の話があり、本プロジェクトを核として、すでに日韓台の「アジア美学史」の共同研究が進行中である。

そこでこのプロジェクトの基本的な方針をここに記す。

1）『アジアの「美学」』の原点としての『日本の「美学」』の影響についての研究

近年、アジア各地でさかんにビエンナーレ、あるいはトリエンナーレが開催され、「芸術のアジア」という意識がたかまりつつある。日本の美術館でもこの種のテーマによる企画展が頻繁に行われている。だがここに一つの問題がある。それはこの「美術」展なるものが、西欧的な「アート」の観念でくくられてしまっていることである。この状況では、真に「アジア的」な美意識とは何かが見失われてしまう危惧を感じる。

この「美術」を最初に西欧的なアカデミーのシステムの導入によって植え付ける役割を担ったのが、明治九年に設立された「工部美術学校」である。この西欧モデルの美術教育は、やがて中国においては日本モデルによる美術教育という形で現れている。こうした美術教育を通じての「美

術」の観念の、アジアにおける歴史的な伝播の問題は、まだ十分に明らかにされていない。
2）アジア近代における「美術」の広がりについての研究
　すでに疑いを入れない事実のように受け入れられてきた「美術」という観念を、ここで歴史的にもう一度掘り起こして検証してみようと考える。現実に近年、ポスト・コロニアルな視点から、それぞれの民族性や伝統へ回帰しようとする傾向が、この美術の世界においても顕著である。その主張を真に理論的に正当化し得るものとして、偏狭なナショナリズムと一線を画する、インター・カルチュラルな立場からする「アジア」の美学の構築が求められる。
3）「アジア」の美学の構築に向けて
　そのためには、いわゆる「美学」とか「美術」という、従来の固定化された枠組みを越えて、それぞれの民族に固有な美意識をジャンル横断的に、場合によってはフィールド・ワークも組み込んでの「民族芸術学」あるいは「比較芸術学」の立場からするアプローチが必要となろう。その最初のステップは、それぞれの民族の伝統に由来する独自の美意識を具体的に洗い直すことから始めなければならない。その上で、これらに通底するアジア的美意識の基層というべきものを、最終的にモダニズムの美学を踏み越えた次元において、「アジアの美学」の理念として捉えることが出来ないかと考えている。

研究拠点の形成

　平成13年に幕張で第15回国際美学会議が開催されたが、そのおりに立命館大学を会場として、アフター・コングレス・シンポジウム「芸術のアジア―外からの眼差しと内からの応え―」を計画した。このシンポジウムは大きな反響を呼び、これを契機として新たに「アジア芸術学会」が結成され、その本部事務局が立命館大学アート・リサーチセンターに置かれることとなった。すでにこの学会のブランチとして「台湾美学芸術学学会」と「インドネシア美学芸術学学会」が相次いで設立され、いまやアジアにおける美学芸術学研究の大規模なネットワークが形成されている。平成14年には韓国美学会の支援を得て、釜山市庁舎国際会議場を会場として、第2回大会が開催され、本年8月には台北の国立国会図書館国際会議場で第3回大会が開かれる予定である。現在UCLAのアジア研究所を中心とする研究拠点形成を交渉中である。これらの組織を通じて、海外での研究協力者としてコンタクトを取っているのは次の研究者たちである。

韓国美学会会長・ソウル大学教授：金文燠氏
台湾美学芸術学学会会長・静宜大学教授：趙天儀氏
インドネシア美学芸術学学会会長・ジョクジャカルタ芸術大学学長：イマデ・バンダム氏
UCLAアジア研究所教授：ミケーレ・マルラ氏
テンプル大学教授：リチャード・シュスターマン氏
ミュンヘン大学教授：ヴォルフハルト・ヘンクマン氏
イエナ大学教授：ヴォウルフガング・ヴェルシュ氏

研究成果と研究活動

平成15年度
　シンポジウム＋パフォーマンス
　「表象芸術2003―アジアの歌と舞―」
総合司会：日本学術会議会員・立命館大学大学院教授：神林恒道
日時：平成15年6月28日・29日
場所：立命館大学以学館2号ホール
主催：日本学術会議芸術学研究連絡委員会
　　：立命館大学21世紀COEプログラム
　　京都アート・エンターテイメント創成研究
後援：日本経済新聞社

この企画は、歌舞伎という日本の伝統芸能を歴史的に振り返るとともに、アジア的美意識の広がりの中で眺めてみようというものである。さらに加えて、「表象芸術」の視点から「アジア的身体表現」の独自性を明らかにしようとした。（詳細は「京都アート・エンタテインメント創成研究　News Letter No.2」を参照のこと）

国際シンポジウム
「鑑賞教育はいかにあるべきか―作ることと見ることと―」
基調講演：韓国嶺南大学教授・国際日本文化研究センター客員教授：閔周植
パネリスト：神戸女学院大学教授：濱下昌宏
：広島大学助教授：青木孝夫
：岡山大学助教授：赤木里香子
：県立島根女子短期大学助教授：松岡宏明
コーディネイター：立命館大学大学院教授：神林恒道
日時：平成16年2月7日
場所：京都国立近代美術館講堂
主催：立命館大学21世紀COEプログラム
：日本美術教育学会

平成16年度
講演会＋シンポジウム
「中国近代絵画の百年―悲壮的芸術史詩―」
講師：国立台北芸術大学教授：林惺嶽
司会：立命館大学大学院教授：神林恒道
日時：平成16年4月4日
場所：京都国立近代美術館講堂
主催：立命館大学21世紀COEプログラム
：日本美術教育学会

中国の近代において洋画はどのようなかたちで受容されたのか、社会主義リアリズムの時代を経て、現代の中国絵画はどのような変貌をとげたか。中国近代絵画百年の歩みを語る。

連続講演会「芸術の日本近代」
第1回：日本人の美意識
講師：立命館大学大学院教授：神林恒道
日時：平成16年4月11日
場所：京都国立近代美術館講堂
主催：立命館大学・アート・リサーチセンター
：日本美術教育学会